
実践報告

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究11
P.54-64 (2023)

2022年度カリキュラムで新設した「地域包括ケア探索実習」 実践報告(第1報)

—学生の振り返りからみたチーム活動による学び—

Practical Report on the “Exploration Practicum in Community-based Integrated Care”, Newly Established in the 2022 Curriculum (1st report); Learning through Team Activities from Student Reflections

藤尾 祐子*
FUJIO Yuko

辻川 比呂斗*
TSUJIKAWA Hiroto

山本 哲子*
YAMAMOTO Tetsuko

野津 美香子*
NOTSU Mikako

榎本 佳子*
ENOMOTO Yoshiko

石塚 淳子
ISHIDUKA Junko

影山 孝子*
KAGEYAMA Takako

川田 梨絵*
KAWATA Ric

平岡 玲子*
HIRAOKA Reiko

鈴木 江利子*
SUZUKI Eriko

依田 真由子*
YODA Mayuko

土居 稚奈*
DOI Wakana

酒井 太一
SAKAI Taichi

林 亮*
HAYASHI Ryo

中林 菜穂*
NAKABAYASHI Nao

山本 多恵子*
YAMAMOTO Taeko

要旨

2022年度カリキュラムで新設した「地域包括ケア探索実習」について、チーム活動による学びを実習終了後に提出された課題レポートの内容分析から検証した。分析にはテキストマイニング手法を用い、単語の出現回数と、共起ネットワーク解析を行った。単語の出現回数では、「チーム」という単語が上位に出現した結果から、学生は課題レポートにおいて「チーム」について多く述べていたことがわかった。また、共起ネットワーク解析では、〈実習体験からの学び〉〈連携についての学び〉〈今後の自己の課題〉の3つのネットワークが認められた。これら3つのネットワークの記述内容は実習目標に対する学修成果であり、すべてのネットワークで「チーム」という単語やチーム活動から得た学びが述べられていた。また、実習目的である看護を学ぶ動機づけとなった記述内容も含まれていた。これらの結果から、「地域包括ケア探索実習」において、単なる集団であるグループではなく、達成すべき共通の目的をもったチームとして活動した学びが、実習の目的、目標の達成を促進したと考えられる。

索引用語：地域包括ケア探索実習、学生、チーム活動、学び

Key words : exploration practicum in community-based integrated care, students,
team activities, learning

1. 緒言

2022年4月、看護基礎教育における保健師助産師
看護師学校養成所指定規則（以下、指定規則）の第5
次改正が行われた。指定規則改正の目的は、わが国の

* 順天堂大学保健看護学部

* *Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*

(Nov. 17, 2022 原稿受付) (Jan. 12, 2023 原稿受領)

急速な少子高齢社会において、人口および疾病構造の変化、家族形態と機能の変容等、社会ニーズに応える看護職者を養成することである。様々な社会ニーズに応えるため、患者をはじめとする対象のケアを中心的に担う看護職者の就業場所は、医療機関に限らず在宅や施設へと拡がっており、多様な場において、多職種と連携して適切な保健・医療・福祉を提供することが期待されており、対象の多様性・複雑性に対応した看護を創造する能力が求められている。第5次指定規則改正では、超高齢社会における「地域包括ケアシステム」に対応できる看護職者の育成として、「ICT、コミュニケーション能力、臨床判断能力、多職種連携、地域・在宅看護論」がキーワードであり、臨地実習単位数の一定程度の自由裁量が大きな特徴である¹⁾。実習に関する見直しについて2017年日本看護系大学協議会の報告書では、「従来の領域別実習の枠組みでは限界」とし、「地域の様々な施設や在宅で暮らす療養者や高齢者の健康と生活を支援する看護実践能力」や「多職種チームにおける連携調整能力」といった超高齢社会の健康課題に対応できる看護人材育成を目指す看護学実習の基準を策定する必要性が述べられている²⁾。

順天堂大学保健看護学部（以下、本学部）は、開学当初より保健師養成課程と看護師養成課程の両カリキュラムを合わせもつ学部である。第5次指定規則改正に伴い、本学部も2022年度よりカリキュラムを改定し、臨地実習を再編して「地域包括ケア探索実習」を1年前期に新設した。「地域包括ケア探索実習」は、看護の対象である地域で生活する人びとと環境、人びとを支える保健医療福祉分野での看護職者の活動について理解することを目的とした。この目的達成のため、早期フィールド体験実習として、入学間もない学生が看護体験ではなく、看護の対象が暮らす地域を探索しながら学ぶ実習とした。また、学びを促進するため課題解決型の実習構成とし、日々の実習はチーム活動により展開した。チームとは、ある目的のために協力し

て行動する集まりであり、チーム活動とは、1人では解決できない問題を解決する、1人ではつくりえない変化を生み出すための活動である³⁾。これに対し、グループとは単なる集団をいい、チームとの違いは達成すべき共通の目的があるか否かである。グループ活動ではなくチーム活動と表現することで、仲間とともに課題を解決し皆でつくり上げる実習であると、学生の自覚を促すことを意図した。

先行研究において、早期体験実習では学生の学修に対する動機づけ⁴⁾、対象者と地域特性および時代背景の理解⁵⁾、実習のグループ活動における協同的な学びの効果として社会的スキルの学習やコミュニケーション能力への効果⁵⁾が示唆されているが、チーム活動による学びについては示されていない。そこで、2022年度カリキュラムで新設した「地域包括ケア探索実習」の報告として、第1報では、実習終了後に提出された課題レポートの内容分析からチーム活動による学びについて検証した結果を報告する。チーム活動に焦点をあてた根拠として、指定規則改正のキーワード¹⁾である「多職種連携」および日本看護系大学協議会報告書²⁾が示す「多職種チームにおける連携調整能力」の基盤となる能力の修得を実習の目的および目標に含んでいるからである。

II. 用語の操作的定義

本研究におけるチーム活動とは、1人では解決できない問題を解決する、1人ではつくりえない変化を生み出すための活動をいう³⁾。また、「地域包括ケア探索実習」における地域包括ケアとは、あらゆるライフステージ・健康レベルの人びとの暮らしを地域で支えるためのケアをいう⁶⁾。

III. 実習概要（図1）

1. 実習目的および実習目標（表1）

実習目的、実習目標、行動目標を表1に示す。

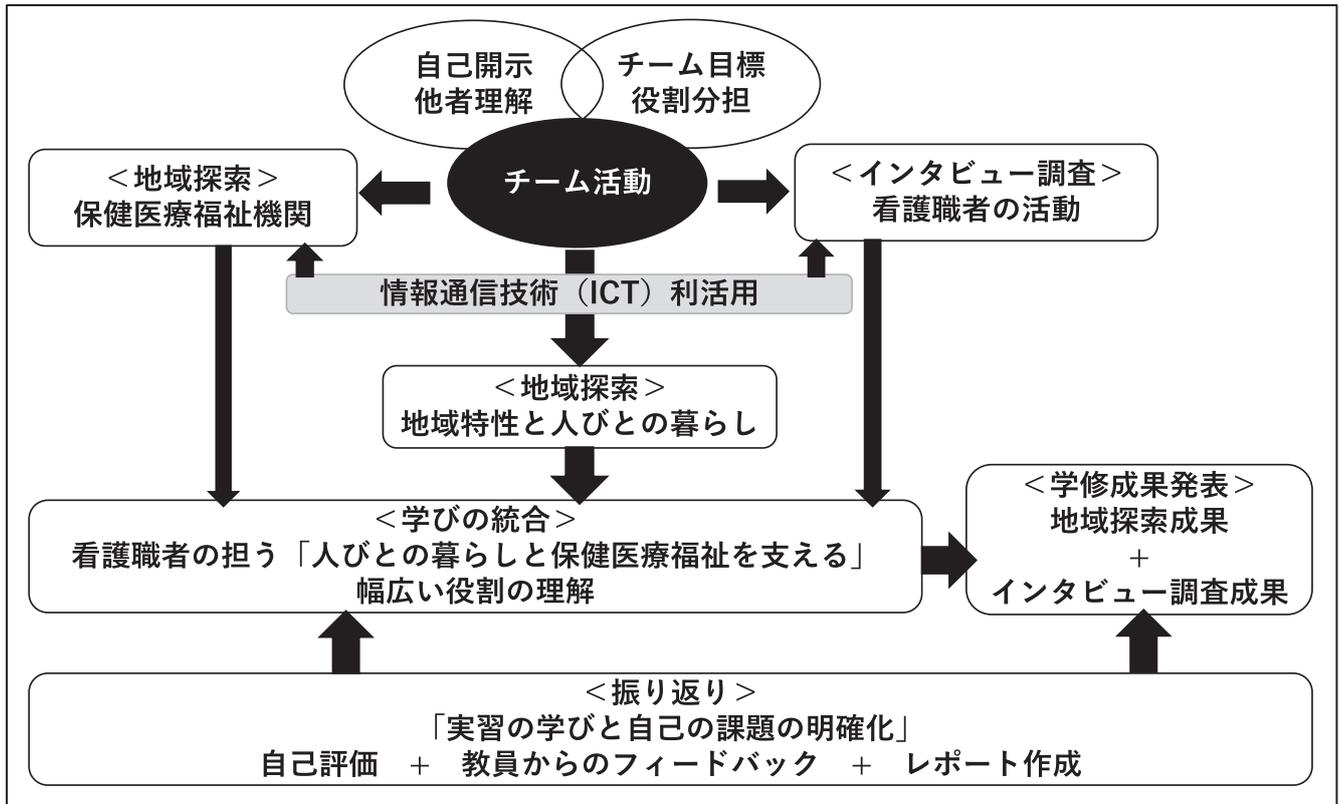


図1 地域包括ケア探索実習の概念図

2. 実習内容 (表2)

実習内容を表2に示す。実習期間は12日間とし、実習時間は1日5コマ10時間と設定した。

3. 実習のチーム編成とチーム活動を促進する工夫

チーム編成は、1年次生134名を学籍番号順に1チーム6～7名配置した。チーム活動を促進する工夫として、実習期間を通してチーム目標を設定した。また、チーム内での役割分担としてチームリーダー、サブリーダー、時間管理係、連絡係、記録係、物品係のいずれかを担うこととした。日々の実習では、午前・午後提示された課題を解決するためチームで協同作業を行い、午前・午後ともに終了時に各自の振り返り→チームでの共有→学年全体での共有を行った。

4. 実習場所

本学部のある静岡県三島市を5地区に分けて地域探索を行った。5地区は介護保険制度における地域包括支援センター⁷⁾の担当地区とした。地域包括支援センターは、地域包括ケアシステムにおける要となる機関である。保健医療福祉機関探索およびインタビュー調査は、高度急性期病院、訪問看護ステーション、保健センター、企業、教育機関、保育所、特別支援学校、地域包括支援センター、高齢者介護施設、居宅介護支援事業所とした。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

学生が回答した課題レポートについて質的記述的に分析した。

表1 実習目的・実習目標および行動目標

<実習目的>

看護職者の様々な活動を看護学教育の早期に学修し看護を学ぶ動機づけとすることを目的に、フィールド体験実習である地域包括ケア探索実習を1年前期の入学直後に履修する。順天堂大学保健看護学部が位置する地域において、地域の特性と人びとの暮らしを知り、少子高齢社会のニーズである地域包括ケアにおける保健医療福祉の拠点となる機関および各機関での看護職者の活動を主体的に探索することで、看護職者の担う「人びとの暮らしと保健医療福祉を支える」多様で幅広い役割を理解する。また、実習にあたってはチームを形成し、チームの一員としての役割を学ぶ。

<実習目標・行動目標>

1. 地域を探索して地域の特性や人びとの暮らしを理解する。
 - 1) 情報通信技術（ICT）を利活用して、地域を探索する準備ができる。
 - 2) 地域探索を通して、地域特性と人びとの暮らしを説明できる。
2. 地域を探索して保健医療福祉機関を調べ、各機関での看護職者の活動と役割を理解する。
 - 1) 地域探索を通して保健医療福祉機関を調べ、機能や役割を説明できる。
 - 2) インタビュー調査を通して、各機関での看護職者の活動や役割を説明できる。
3. チームを形成して実習し、メンバーとの相互理解を深め、チームの一員としての役割を学ぶ。
 - 1) チームメンバーに自己開示ができ、他者の意見を傾聴できる。
 - 2) チームメンバーと協力し、課題に取り組むことができる。
 - 3) チーム活動を通して、看護職者に必要な協働する力の必要性について説明できる。
4. 看護学生として責任ある態度で行動する。
 - 1) 看護学生として、ふさわしい身だしなみで実習できる。
 - 2) 実習に関わるすべての人に対して、丁寧な言葉遣いや挨拶ができる。
 - 3) 自己の体調管理ができ、体調変化を報告できる。
 - 4) 実習で知り得た情報等の守秘義務を守ることができる。
5. 実習を通して学んだことを振り返り、自己の課題を明らかにする。
 - 1) 実習の学びを言語化し、成果を他者に伝えることができる。
 - 2) 実習での体験を振り返り、実習の学びと今後にむけた自己の課題を述べることができる。

2. 対象者

順天堂大学保健看護学部 2022年度1年次生 134名を対象とした。

3. データ収集方法

実習終了後に提出された課題レポートについて、成績が確定した後にレポートの記述内容を分析することへの協力を依頼し、同意が得られたレポートを調査対象とした。

4. 調査内容

課題レポートのテーマ「実習での体験を振り返り、実習の学びと今後にむけた自己の課題を明らかにする」から、「実習の学び」と「今後の自己の課題」について調査した。

5. データ分析方法

樋口⁸⁾が開発したテキストマイニングソフトであるKH Coder 3を用いて内容分析を行った。分析はレポート内容の全体を概観した後、「実習の学び」および「今

表2 実習内容

実習日	実習課題	実習内容
1日目	導入	オリエンテーション 事前学習：用語の調べ学習と自己目標の設定
2日目	チーム形成	自己開示・他者理解とチーム目標の設定・役割分担 地域探索：やさしいマップ作り
3日目	地域探索	ICT利活用による準備：地域特性と人びとの暮らし ICT利活用による準備：保健医療福祉機関
4日目	地域探索	地域探索：地域特性と人びとの暮らし
5日目	地域探索	地域探索：保健医療福祉機関
6日目	インタビュー調査	ICT利活用による準備：インタビュー調査機関 インタビュー調査準備：インタビューガイド作成とロールプレイ
7日目	インタビュー調査	看護職者へのインタビュー調査
8日目	学びの統合	地域探索とインタビュー調査のまとめ
9日目	学びの統合	学修成果発表の準備：発表抄録作成 学修成果発表の準備：ポスター作成
10日目	学修成果発表	ポスターセッション 学びの共有
11日目	振り返り	実習の自己評価 担当教員からのフィードバック
12日目	振り返り	実習体験の振り返り 実習の学びと自己の課題の明確化

後の自己の課題」について、チーム活動による学びに焦点をあてて分析した。分析にあたり、まず、学生の各レポートを一データとして用意した。次に形態素解析の結果から、複合語として抽出すべき単語の指定を行った。具体的には、「地域包括支援センター」「地域包括ケア」「探索実習」「保健医療福祉」などである。テキストマイニング手法としては単語の出現回数と、共起ネットワーク解析を行った。単語の出現回数

については、頻出する上位150語の抽出語リストを作成した。共起ネットワーク解析においては、集計単位を文とし、出現数による語の取捨選択は最小出現数100、文書による語の取捨選択は最小文書数1、共起関係の種類は語-語、描写する共起関係の選択はJaccard係数上位60と設定して解析を行った。なお、共起ネットワーク（媒介中心性）による語句の関連性分析は、出現パターンの似通った語、すなわち共起の

程度が強い語を線で結んだネットワークを描いたものである。共起ネットワークの共起の程度と線の太さは、Jaccard 係数で測定した共起の程度に合わせて、強い共起関係ほど太い線で描画される。また、描画された円の大きさ、濃さは単語の出現数と比例し、大きく濃い円ほど、出現数が多く中心性の高い（Centrality）単語であることを表している。

V. 倫理的配慮

順天堂大学保健看護学部の学部長に研究の同意を得た後、対象学生には成績評価完了後に、課題レポートの調査について目的、方法、倫理的配慮と、成績評価が完了したこと、調査への回答は成績や今後の学生生活に一切影響しないことを文書により Web 配信し、調査協力を依頼した。また、調査協力依頼書と併せて参加辞退書も配信し、参加辞退書の提出により調査への参加辞退の機会を確保した。調査協力依頼書には、調査協力は自由意思であること、参加辞退の意思表示により不利益は被らないこと、調査協力依頼、データ回収、データ分析は、それぞれ別の教員が行うため個人は特定されないことを明記して強制力が働かないよう配慮し、任意性と匿名性を保障した。なお、本研究は順天堂大学保健看護学部研究等倫理審査会の承認を得て実施した（順保倫第 3-08 号）。

VI. 結果

1. 分析対象

実習を履修した 134 名全員の学生から研究の同意が得られ、134 名が提出した課題レポートを分析対象とした。

2. 分析対象単語

テキストマイニングによる分析対象となった単語は、総単語数（分析対象となった単語の延べ数）が 119,878 語、異なり単語数（単語の種類数）は 4,174

語であった。なお、これらの数は助詞や助動詞のようにどのような文章でも用いられる一般的な語は含まれていない。

3. 単語の出現回数（表 3）

出現回数が多かった順に上位 150 の単語を表 3 に示す。「地域」の 728 回を筆頭に「自分」「実習」「思う」「学ぶ」「チーム」「インタビュー」「多い」「看護師」「人」となっていた。順位および出現回数は、上位 10 位では 728 回～383 回であった。また、11 位～69 位では 378 回～102 回、71 位～148 位で 99 回～50 回であった。

4. 共起ネットワーク（図 2）

共起ネットワークでは、3つのネットワークが認められた。これらのネットワークは、ネットワークを形成する単語が含まれるレポートの記述内容から、〈実習体験からの学び〉のネットワーク群（図中 1）、〈連携についての学び〉のネットワーク群（図中 2）、〈今後の自己の課題〉のネットワーク群（図中 3）に大別された。

〈実習体験からの学び〉のネットワーク群（図中 1）では、「地域」「実習」「学ぶ」「大切」「チーム」「活動」「意見」「自分」「思う」「伝える」「相手」「情報」「共有」「グループ」「メンバー」「地域包括ケア」「地区」「調べる」「三島」「探索」「医療」「実際」「多い」「高齢者」「機関」「看護」「看護師」「インタビュー」「患者」「支援」などの単語が多くあった。これらの単語（以下、下線部）が含まれるレポートの記述は、「三島の地域の人々の生活の様子や医療について知ることができ有意義な実習であった」「実際に地域を探索すると高齢者の方と多く遭遇した」「実際に地域探索し地域の特色とそれぞれの機関がどう機能しているか調べた」などがあり、これらは〈実習体験からの学び〉のネットワーク群中において「地域」を中心とした《地域探索からの

表3 頻出語(上位150)

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	地域	728	51	ケア	135	101	学び	70
2	自分	610		時間	135	102	それぞれ	69
3	実習	528	53	コミュニケーション	134		作業	69
4	思う	441	54	見る	127		車	69
5	学ぶ	431		持つ	127		大きい	69
6	チーム	425	56	保健師	121	106	場所	68
7	インタビュー	410	57	目標	120	107	関係	67
8	多い	399	58	伝える	117		相談	67
9	看護師	387		良い	117		北上	67
10	人	383	60	行く	114	110	話す	66
11	看護	378	61	働く	113	111	学校	65
12	考える	357		利用	113		気	65
13	地区	352	63	人々	112		取る	65
14	意見	350	64	質問	111	114	支える	64
15	行う	341		職種	111	115	家族	63
16	医療	295	66	自己	107		子ども	63
17	三島	291		様々	107		全体	63
18	感じる	289	68	積極	106		暮らし	63
19	病院	288	69	少ない	102	119	最初	61
20	探索	281		他	102		事前	61
21	大切	266	71	重要	99	121	具体	60
22	グループ	258	72	話	98		自然	60
23	課題	242	73	バス	97		静岡	60
	聞く	242		介護	97	124	学生	59
25	知る	241	75	言う	95		全員	59
26	高齢者	229	76	住む	94		対応	59
27	患者	211		特性	94		仲間	59
	役割	211		内容	94		特に	59
29	分かる	208	79	違う	90		方々	59
30	情報	203		今	90	130	お話	58
31	地域包括ケア	202	81	協力	88		視点	58
32	今回	201	82	錦田	87	132	知識	57
33	調べる	199		行動	87		南	57
34	機関	191	84	探索実習	86	134	身	56
	連携	191	85	意識	85	135	見つける	55
36	活動	188		地域包括支援センター	85		取り組む	55
37	必要	176	87	考え	84		分担	55
38	実際	174	88	保健医療福祉	83	138	一つ	54
39	共有	172	89	前	82		効率	54
40	発表	170	90	たくさん	81		坂	54
41	施設	169	91	学習	80		発言	54
42	メンバー	165	92	力	79	142	ポスター	53
43	出来る	164	93	多く	78		人口	53
44	健康	153		訪問	78	144	少し	52
	相手	153	95	得る	76	145	最後	51
46	生活	152	96	言葉	74		作る	51
47	仕事	149	97	交通	73		実感	51
48	今後	148	98	気づく	72	148	関わる	50
	支援	148		住民	72		振り返る	50
50	理解	142	100	出る	71		深める	50

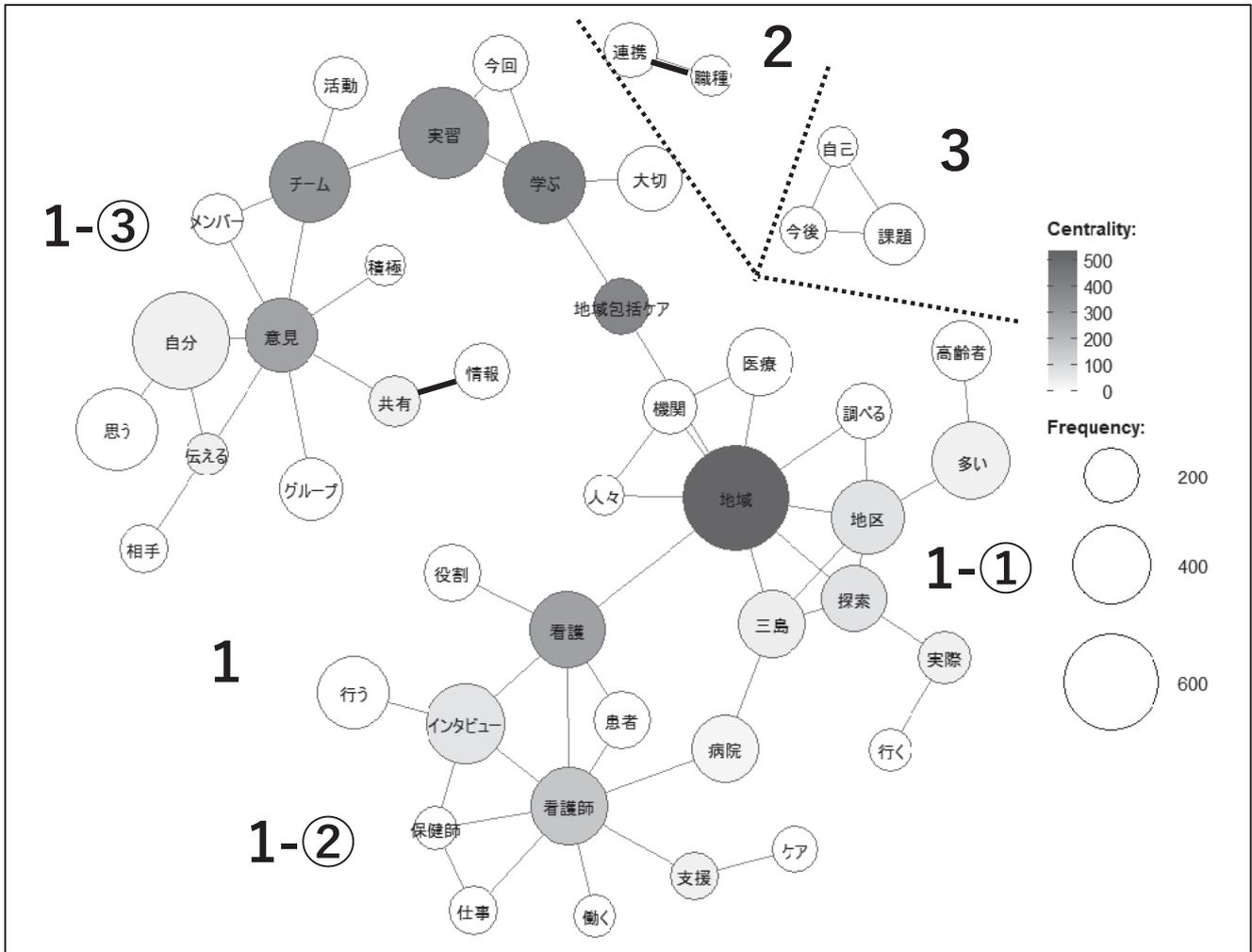


図2 課題レポートの共起ネットワーク(上位60の共起関係)

学び》を示すネットワークが形成された(図中1-①)。次に、「インタビューを通して看護職が活躍する場は病院だけに留まらず広く存在するとわかった」「今回のインタビューで看護は患者が主体であることを学んだ」「どちらの看護師も、その地域の特性に合った支援や援助をしていることがインタビューを通して学べた」などがあり、「看護師」を中心とした《インタビュー調査からの学び》を示すネットワークが形成された(図中1-②)。さらに、「チームの活動では課題を進めようと自分から意見を伝えることができた」「実習中は毎回、自分が得た情報や振り返りをチーム内で欠かさず共有した」「実習中はグループのメンバーがとても

優しく自分の意見に耳を傾けてくれるので、徐々に意見を言うのが楽しくなっていた」「この実習を通して、自分のことを伝えること、相手のことを知ること、情報を共有することの大切さを感じた」「私がこの実習を通して学んだことはチームワークの大切さだ」「実習を通じて地域包括ケアについて理解でき、チームで協力することの大切さを改めて学んだ」などがあり、「チーム」および「実習」を中心として《実習のチーム活動からの学び》を示すネットワークが形成された(図中1-③)。

〈連携についての学び〉のネットワーク群(図中2)では、「連携」「職種」の単語があった。これらの

単語が含まれるレポートの記述は、「地域包括ケアとは、保健医療福祉の職種が連携し、地域の人々が住み慣れた場所で自立した生活が送れるようサポートすること」「この実習で培った主体性や協調性を今後の実習でも活かし、多職種と連携する役割を担えるようになりたい」「将来は、このような幅広い職種と連携して仕事をするのだとイメージできた」「今回学んだ地域包括ケアの重要性、様々な職種の人と連携する必要性を忘れず、今後もさらに学んでいきたい」などがあった。

＜今後の自己の課題＞のネットワーク群（図中3）では、「課題」「今後」「自己」などの単語があった。これらの単語が含まれるレポートの記述は、「今後の課題として自分の意思を相手に進んで伝えること、仲間と協力して物事を達成すること」「今後の自己の課題は仲間と協力する中で自分の意見をしっかり伝えることだ」「今後に向けた自己の課題として自分の将来像であるチーム医療で活躍できる看護師になること」「今後の課題は自己開示と相手の意見を尊重することだ」などがあった。

また、ネットワーク全体では中心性の高い(Centrality)単語として「地域」「実習」「学ぶ」「チーム」「看護」「意見」「地域包括ケア」が描画された。強い共起関係として太い線で描画されたのは「職種」と「連携」、「情報」と「共有」であった。

VII. 考察

2022年度カリキュラムで新設した「地域包括ケア探索実習」について、実習終了後に提出された課題レポートから、チーム活動による学びを検証した。

テキストマイニングの分析結果から、まず、単語の出現回数では、多かった順に「地域」「自分」「実習」「思う」「学ぶ」「チーム」と、「チーム」という単語が上位6位425回出現していた。この結果から、学生は課題レポートで「チーム」について多く述べており、

チーム活動による学びが示唆された。

次に、共起ネットワーク解析では、＜実習体験からの学び＞＜連携についての学び＞＜今後の自己の課題＞の3つのネットワークに大別された。これら3つのネットワークそれぞれにおいて、「私がこの実習を通して学んだことはチームワークの大切さだ」「実習を通じて地域包括ケアについて理解でき、チームで協力することの大切さを改めて学んだ」「今後の課題として自分の意思を相手に進んで伝えること、仲間と協力して物事を達成すること」「今後の課題は自己開示と相手の意見を尊重することだ」「この実習で培った主体性や協調性を今後の実習でも活かし、多職種と連携する役割を担えるようになりたい」といった記述内容があり、すべてのネットワークで「チーム」という単語やチーム活動から得た学びが述べられていた。この「チーム」という単語は、中心性の高い(Centrality)単語であったことから、レポートのテーマ「実習での体験を振り返り、実習の学びと今後に向けた自己の課題を明らかにする」に対して、チーム活動が大きく影響していたことが示唆された。チームビルディングの技術の著者である関島は、『複雑な問題の解決にはチームが必要になる』『チームワークは活動でつくるもの』と述べている³⁾。実習の展開において入学間もない学生たちは、日々、提示される課題をチーム活動により解決していく過程を繰り返した。このプロセスがチーム形成を促し、「実習の学び」および「今後の自己の課題」の明確化へとつながったのではないだろうか。そして、共起ネットワークで形成された＜実習体験からの学び＞＜連携についての学び＞＜今後の自己の課題＞の記述内容は、実習目標(表1)である地域特性や人びとの暮らしの理解、保健医療福祉機関と看護職者の活動の理解、チームの一員としての役割と協働する力の必要性の理解、自己の課題の明確化に対する学修成果であった。このように、実習目標に対する学修成果をチーム活動が促進した。チーム学習の効

果について述べられた研究においても、学修成果や対人関係、授業態度の改善への効果が報告されており⁹⁾、本実習においても同様に、チーム活動による学びが学修成果へとつながった。また、これらの学びは図1に示すように、実習を構成する上で意図的にチーム活動を取り入れ、実習の目的および目標（表1）にチームの一員としての役割を学ぶことを明示した効果といえるのではないだろうか。チーム活動の促進に関する研究では、チーム内での役割分担の必要性¹⁰⁾が述べられており、実習のチーム活動の促進に、実習プロセス早期でのチーム目標の設定と役割分担が効果的であったとも考えられる。

さらに注目すべき点として、〈連携についての学び〉のネットワークがある。この「連携」「職種」について、早期体験実習の研究では「医療・福祉と地域の人々の生活を結びつけて考えられる実習内容の工夫が必要である」と課題が述べられているが⁴⁾、課題レポートの「地域包括ケアとは、保健医療福祉の職種が連携し、地域の人々が住み慣れた場所で自立した生活が送れるようサポートすること」「将来は、このような幅広い職種と連携して仕事をするのだとイメージできた」等の記述内容から、看護の対象となる人びとを支える保健医療福祉の「連携」に気づくことができた実習となったのではないだろうか。その背景には、実習のチーム活動を通して学生同士が「連携」する意義を学んだことが影響していたと考えられる。共起ネットワークにおいても「職種」と「連携」、「情報」と「共有」が強い共起関係で描画されており、看護職者に必要とされる職種間連携や情報共有についても学ぶことができたと思われる。この「連携」についてWHOは、専門職連携教育（Interprofessional Education：IPE）を医療人材の育成に必要不可欠なステップと提唱している¹¹⁾。しかし、日本の保健医療福祉系の専門職養成教育でIPEは必須ではなく、養成教育の法的な指定規則にIPEが規定されている職種はない¹²⁾。チーム活動により展開

した「地域包括ケア探索実習」が、今後はIPEへとつながっていくことも期待される。さらに、「この実習で培った主体性や協調性を今後の実習でも活かし、多職種と連携する役割を担えるようになりたい」の記述内容もあり、チーム活動による学びが看護を学ぶ動機づけとなり、実習目的（表1）の達成を促進した。

今回、学生の課題レポートから検証したチーム活動による学びは、先行研究において示されているグループ活動の効果である社会的スキルやコミュニケーション能力とは異なり、学修成果として「地域包括ケア探索実習」の目的、目標の達成を促進した。これは、実習展開において、単なる集団であるグループではなく、達成すべき共通の目的をもったチームとして活動した成果であると考えられる。

VIII. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、2022年度カリキュラムで新設した「地域包括ケア探索実習」のチーム活動による学びを検証するための単年度調査であり、本調査結果を一般化することには限界がある。次年度以降も調査を重ねて丁寧に検証していく必要がある。また、本研究では実習目標の評価との対比による検証は行っていないため、今後の課題として検証していくことで、実習内容の改善につながるものと思われる。

IX. 結論

2022年度カリキュラムで新設した「地域包括ケア探索実習」について、チーム活動による学びを実習終了後に提出された課題レポートの内容分析から検証した。分析にはテキストマイニング手法を用い、単語の出現回数と、共起ネットワーク解析を行った。単語の出現回数では、「チーム」という単語が上位に出現した結果から、学生は課題レポートにおいて「チーム」について多く述べていたことがわかった。また、共起ネットワーク解析では、〈実習体験からの学び〉〈連

携についての学び><今後の自己の課題>の3つのネットワークが認められた。これら3つのネットワークの記述内容は実習目標に対する学修成果であり、すべてのネットワークで「チーム」という単語やチーム活動から得た学びが述べられていた。また、実習目的である看護を学ぶ動機づけとなった記述内容も含まれていた。これらの結果から、「地域包括ケア探索実習」において、単なる集団であるグループではなく、達成すべき共通の目的をもったチームとして活動した学びが、実習の目的、目標の達成を促進したと考えられる。

引用文献

- 1) 厚生労働省：看護基礎教育検討会報告書（令和元年10月15日）
<<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>, (2021. 10. 5)>
- 2) 一般社団法人 日本看護系大学協議会：平成28年度文部科学省 大学における医療人材養成の在り方に関する調査研究委託事業「看護系大学学士課程における臨地実習の先駆的取り組みと課題－臨地実習に基準策定に向けて－」報告書(平成29年3月)
<<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2017/03/H28MEXTProject.pdf>, (2021. 10. 5)>
- 3) 関島康雄：改訂 チームビルディングの技術，経団連出版，2019.
- 4) 古市清美，高橋ゆかり，本江麻美：早期体験学習における看護学生の学びに関する研究 ヘルスサイエンス研究，15(1), 17-22, 2011.
- 5) 小林淳子，渡部光恵，藤代知美：看護学生と指導教員が捉えた早期体験実習(フィールド体験実習)の現状と課題（報告），四国大学紀要，(B) 43：1-7, 2016.
- 6) 公益社団法人 日本看護協会：2025年に向けた看護の挑戦 看護の将来ビジョン いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護，2015.
<<https://www.nurse.or.jp/home/about/vision/pdf/vision-4C.pdf>, (2021. 10. 6)>
- 7) 厚生労働省：地域包括支援センターについて
<<https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/000756893.pdf> (2022. 11. 12)>
- 8) 樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して 第2版，ナカニシヤ出版，2021.
- 9) 内田君子，大矢芳彦，奥田隆史：情報リテラシー教育におけるチーム学習の効果，情報処理学会第79回全国大会，2017.
- 10) 坂井敬子：自治体・地域事業所と連携したPBL授業の実践報告：学生の振り返りにみるチーム活動と学習プロセス，静岡大学教育研究，12, 71-79, 2016.
- 11) WHO：Framework for action on interprofessional education and collaboration practice, 2010.
- 12) 埼玉県立大学：IPWを学ぶ 利用者中心の保健医療福祉連携，中央法規出版，2018.